

令和2年度厚生労働科学研究費補助金
(成育疾患克服等次世代育成基盤研究(健やか次世代育成総合研究)事業)
『わが国の至適なチャイルド・デス・レビュー制度を確立するための研究』
分担研究報告書

地域自治体事業として実施する Child Death Review(CDR)

地域自治体主導型(隣接自治体) CDR モデル確立と行政との連携に関する研究

研究分担者 太田 邦雄 金沢大学 医学教育研究センター 准教授
研究協力者 塚 正彦 金沢大学 法医学講座
種市 尋宙 富山大学 小児科
松尾 星弥 福井大学 小児科

石川県は人口 11,137,18 名であり、18 歳未満人口は 171,991 名、2014 年から 3 年間の小児人口(18 歳未満)死亡数はそれぞれ 44 名、43 名、43 名であった(人口動態統計)。県内中核病院小児科では、そのうち 33 名、27 名、30 名を把握し、各病院ではいわゆるデス・カンファレンスが行われている一方、成人を中心とした死因究明制度は石川県医師会が中心となっており行われているものの、予防のための子どもの死亡検証(チャイルド・デス・レビュー 以下 CDR)についての取り組みは検討課題であった。

そこで CDR が未実施の石川県でいかに CDR を確立し、関係者が連携していくか、地域自治体主導型 CDR モデル確立を目指して、令和 2 年度に石川県 CDR 連絡協議会準備委員会ならびに多職種勉強会を開催した。実施後のアンケート調査をもとにモデル確立のための課題抽出と考察を行った。

CDR 多職種勉強会は啓発に効果的であった。また参加者は石川県版 CDR 発足に向けた制度設計を担うコアメンバーに相応しい臨床医(中核病院小児科、医師会)、法医学者、行政関係者であった。またコアメンバーに加えて警察、検察、児童相談所、保健所等の参画を呼びかけ CDR 委員会準備委員会を発足させることが望ましいと考えられた。また専門家パネルによる検証等を見据えて隣接自治体との連携も将来的な課題であることが考えられた。

本州日本海側の中央付近に位置する石川県は人口 11,137,18 名であり、ほぼ日本の百分の一の規模である。18 歳未満人口は 171,991 名、2014 年から 3 年間の小児人口(18 歳未満)死亡数はそれぞれ 44 名、43 名、43 名であった(人口動態統計)。

このうち病院小児科が把握している割合を県内中核病院(注 1)に聞き取り調査したところ、それぞれ 33 名、27 名、30 名であった。各病院ではいわゆるデスカンファレンスが行われているが、医学的死因究明に限ってみても悉皆データにはほど遠い現状が明白になった。

一方石川県では、成人を中心とした死因究明制度が金沢大学法医学教室 塚正彦教授の指導の下、石川県医師会が中心となっており行われていたが、予防のための子どもの死亡検証(チャイルド・デス・レビュー 以下 CDR)についての取り組みは検討課題であった。

注 1 金沢大学病院、金沢医科大学病院、金沢

医療センター、石川県立中央病院、公立能登総合病院、小松市民病院、公立松任石川中央病院、恵寿総合病院、輪島市立病院、珠洲総合病院

A. 研究目的

CDR 未実施の地域において CDR 実施の機運を盛り上げ、地域主導型の CDR モデルを確立するために、多職種勉強会を開催し、課題を抽出すること。

B. 研究方法

多職種との連携～石川県 CDR 多職種勉強会～と題して令和 2 年 2 月 16 日(日)に金沢市内ホテルで石川県 CDR 多職種勉強会を開催した。

「最近の CDR の動向」(名古屋大学附属病院 救急科 沼口敦)と「CDR とは何か?」(国立成育医療研究センター 救急診療科 内田佳子)のレクチャーのあと、「模擬ケースの個別 CDR」(国保旭

中央病院 小児科 仙田昌義)を実演し、小グループに分かれてロールプレイ「模擬ケースの個別CDR」を行った(四国こどもとおとなの医療センター 小児科 木下あゆみ)

終了時にアンケート調査結果を行い、課題の抽出を行った。

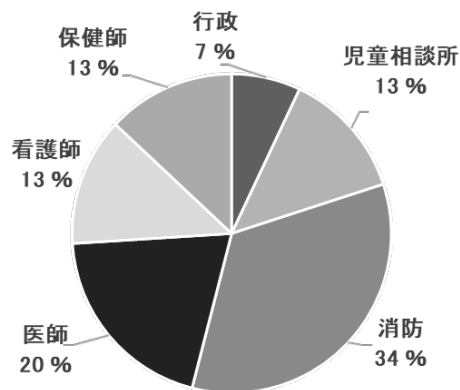
(倫理面への配慮)

アンケート調査は無記名で実施し、倫理面に配慮した。

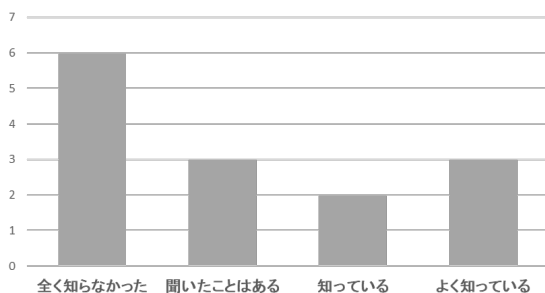
C. 研究結果

14名から回答を得た

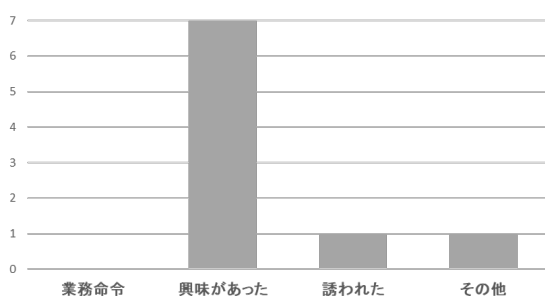
Q1. 職種を教えてください



Q2. CDRを知っていましたか



Q3. 勉強会に参加した理由を教えてください

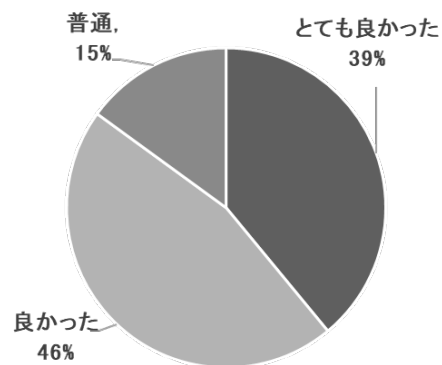


Q4. ご参加いただいた理由を教えてください

- ・虐待死の予防に生かすため

- ・「予防」のために、本県での現状も垣間見たいと思ったため
- ・小児のCPAに対して残念な気持ち、悔しい気持ちで参加した
- ・興味があった
- ・知らなかったから
- ・子供の大切さを再確認するべく参加した
- ・県医師会で死因究明、警察医として検死等に関わっている
- ・石川でも開始されるだろうから、理解しておきたかった
- ・虐待予防、子育ての支援の研究、支援活動をしていた。たまたま勉強会の情報を得、参加した。普段、厚労省の虐待レビューをよく使用するので、その面からも興味があった。
- ・予防という点で興味を覚えた
- ・日々の業務の中でも関係する内容だったため

Q5. 勉強会に参加して良かったと思いますか



その理由

- ・考えていたよりもおおきな視点であることがわかった
- ・知り得たことが良かった
- ・情報収集の重要性を認識した

Q6. 今後、CDRに関する勉強会を開催するにあたって、あった方が良いと思われる項目と改善点をご提案ください

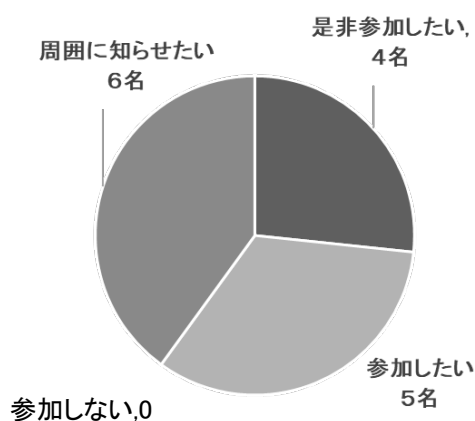
- ・もう少し早く案内があると良い
- ・日程・時間帯
- ・2時間30分から3時間が必要では?
- ・勉強会の広報方法
- ・プロファシリテーター(第3者)が必要。多職種が集まるとお互い気を遣って、ざっくりとに話せないため。

Q7. ご意見、ご感想、ご質問

- ・貴重な機会だった
- ・周知が直前だったので、さらに市町等へ広く

知らせる余裕がなかったことが残念だ
・3回参加して身につくと自分は思っている

Q8. 次回の勉強会に参加したいと思いますか



D. 考察

興味があって参加した参加者が14名中12名であるにもかかわらず、CDRをよく知っている、知っていると答えたのは5名に留まり、認知されていない現状が伺われた。一方で周知の必要性和そのための多職種勉強会の効果を認めており、今後啓発のための講習会等の継続的な開催が望まれた。

またCDR発足に向けて、制度設計を担うことが期待される臨床医（中核病院小児科、医師会）、法医学者、行政が本勉強会に参加しており、今後がコアメンバーとして発展することが期待された。

また同時にコアメンバーに加えて警察、検察、児童相談所、保健所等の参画を呼びかけること、さらに専門家パネルによる検証など石川県単独では高度の専門性、持続性に懸念が生じる可能性もあり、今後の課題と感じた。

E. 結論

地域自治体主導型 CDR モデル確立に向けて、多職種勉強会を開催した。

より一層の啓発のため多職種勉強会を継続する一方、行政と連携してCDR準備委員会の媚態となることが期待された。

F. 研究発表

太田邦雄 概観検証からの具体的な提言や予防策へのつながり 日本小児科学会雑誌 第

125 巻第2号 171(51), 2021

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

文 献

- 1) 令和3年1月28日 予防のための子どもの死亡検証(Child Death Review)に関する説明会資料：
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000123792_00001.html